

## ☆第5分科会「DV」

### 「DVのない社会をめざして」～みんな大切な人のあなたにできることは…～

初めて日本女性会議に参加させていただきました。分科会では、「若い人や子どものDV・性暴力被害の現状と問題点を各現場から」が問題提起として挙げられました。2014年各都道府県DVセンターへの相談件数は10万件超となり、警察への相談件数も過去最多の2万件超との報告がありました。強く心に残ったのは、予防教育でした。DVは、「ジェンダーの暴力」であるので、幼少期、小中高でのジェンダー平等教育が必要であるとのことでした。幼少期から取り組むべきとお話にショックを受けましたが、DV被害の表面化が増加している今、待ったなしの対策が必要であることを痛感いたしました。また、高齢者の認知症、生活困窮など、複雑なケースも増加しており、現場では様々な対応が求められているということです。制度の枠からこぼれおちる被害者をどのように支援していくのか？最後は、被害者の立場にたって、相談に一緒に行きあげるのが支援であるとのことでした。まずは、自分にできることをと決意して、分科会を終えました。

(文責 森本洋子)

## ☆第6分科会「セクシュアル・マイノリティ」

### ありのままを生きられる虹色社会に～人の数だけ性がある～

32年の日本女性会議の歴史のなかで、初めてセクシュアル・マイノリティが取り上げられ、会議のなかで最初に予約が満席になった分科会です。今年4月、文科省から初めて、小・中・高校生のセクマイの子どもへの配慮についての通達が出されています。

ファシリテーターには、LGBT支援団体「プラウド岡山」代表の鈴木富美子さん、助言者に岡山大学病院ジェンダークリニックの中塚幹也さん。そして、LGBTそれぞれの当事者7人(カップル2組)がパネラーでした。子ども時代からご自身の性に違和感と生きづらさを持ちながら過ごし、それぞれに乗り越えられ、自分らしく生きることの誇りをもっておられるご自身の言葉でのライフヒストリー。そして、今、抱えている制度や社会的な課題、そして夢。とても準備・整理された内容は濃く、参加者は固唾を飲んで聞き入っていましたが、会場全体がやさしい空気に満たされていたのが印象的でした。私自身が学び、できることを皆で取り組みたいです。

(文責 鬼木のぞみ)

## ☆第7分科会「貧困」

### 現場で考える貧困家庭への支援～ひとり親家庭の子どもたち～

現在、貧困の原因は、非正規雇用の増加や、派遣切り、ひとり親家庭などです。特に貧困は女性や子どもなど社会的に弱い立場の人々に多いと言われます。昨今の現状を実例を紹介しながら(個人情報が多いので詳しくは書けません)、今の大人たちに何ができるか、行政として何にすぐ取り組むべきかを真剣に考えさせられた内容でした。大阪の西成区の子どもの現状が今や全国に広がりつつあるとのこと。今年事件になった大阪寝屋川の中学生の一件も記憶に新しいですが、なぜ子どもたちが家に帰らないのか。帰らないのではなく、DVや虐待などで、帰れない現実が多くあるといいます。子どもに罪はないのに何故こんなに親のことで悲しい運命と戦っているのでしょうか。涙が止まりませんでした。また法整備の観点から、親から自立して仕事に励み収入が得られるようになると、どうしようもない親の扶養義務が発生してしまいます。この子どもたちを救う手立てはないのか、講師の生田先生が強く訴えられていたのに共感するとともに喫緊の課題と感じました。

(文責 頓宮美津子)